

「いい仕事してますねえ」とは、皆さんもよくご存じの通りテレビ東京の看板番組「開運！なんでも鑑定団」にレギュラー出演している古美術鑑定家中島誠之助氏の決め台詞です。収集家ではない私でも、古伊万里を始めとする東洋や日本の陶磁器について蘊蓄を傾ける際の水際立った語り口には思わず引き込まれます。最後に作品を愛おしむように「ぜひ大切になさってください」という言葉を告げながら、その作品を生み出した匠の技を讃えるべく「いい仕事してますねえ」と感に堪えないような思いが吐露されると、聴き入っている私までも、なぜか深い喜びに満たされてしまうのです。

幼少期から大学を卒業するまで私はずっと池袋駅の近くに住んでいたのですが、自宅の隣りには左官屋さん、裏手には建具屋さんが控えている庶民的な町でした。放課後には原っぱで仲間とソフトボール、キックボール、缶蹴り等に熱中していましたが、雨が降って外遊びができないときには、しばしば建具屋さんの仕事場に上がり込んで匠の技に見入ることを常としていました。まさにフーテンの寅さんの寅屋一家のように、皆さん心暖かく、優しい一家でした。今思えば邪魔者以外の何者でもなかった腕白坊主を、いやな顔一つせずに、にこやかに受け入れてくださっていたのです。

スギ、タモ、マツなどの鮑屑やおが屑からほのかに立ち上がる木の香に包まれ、障子戸、引き戸などが巧みに仕上げられていく工程を飽きもせずじっと見入るのです。格子戸を作るときに釘をまったく使わずに棧を組み、臍を継ぐとき、一切の緩みや弛みもなくスッと嵌る荘厳な一瞬を目の当たりにするたびに、あたかも聖なるものに触れたような感動を覚えさせられたことでした。

宮城学院のキャンパスに通い始めて6年目となります。キャンパスに足を運び入れるたびに、未だに心高鳴る喜び満たされている自分がいます。気品に満ちた端麗なキャンパスだからです。春、桜吹雪が舞った翌日も、秋、マロニエやイチョウの色づいた葉が夜来の風に舞った翌日も、花びら一つ、落ち葉一つ見当たらないほど見事なまでに掃き清められています。大抵、朝の7時40分頃には出校しますが、このキャンパスの美しさが保たれるために、すでに光和さんの25名の職員の方々が一糸乱れず、それぞれの持ち場で一斉に清掃の仕事についています。

確か宮城学院に着任して間もない5月頃、キャンパスを取り囲む屋根付き回廊のタイルの床面を、光和の方がモップで拭いている姿を目の当たりにし、一瞬意味が分からず「何をなさっているのですか」と問いかけてしまいました。「屋根付き回廊の床面はモップで清掃することになっています」との返答に、「え、いくら屋根があるからと言って、外ですよ、外なのにモップ掛けをするのですか」と、その徹底した清掃の姿勢に度肝を抜かされたことでした。また、松脂がこびりついたタイルを高圧洗浄機で一枚一枚、長い時間をかけて丁寧に洗い流している姿に接した時も、「そこまでやりますか」との驚きを覚えさせられたことでした。

キャンパスが新緑で最も美しく装われる5月、同窓会のホーム・カミングディに備え、ピアノ池の水を抜き、清掃し、水漏れをチェックし、新しい水をはってくださいます。その折、鯉が産卵できるように杉の大きな枝をわざわざ切り取って漬け置きするなど、実に細やかな配慮もしてくださっています。池の清掃と並行して、ぐんぐんと伸びる芝生の最初の刈り取りが、この季節には行われます。新茶ではありませんが、新芝が刈り取られ、その馥郁とした香気にキャンパス全体が包まれます。あたかも自分が巨大な草饅頭のなかに入れられたような不思議な感覚に浸れるのも、この時期の宮城学院の醍醐味でしょう。

国立大学の建物の管理や清掃は通り一遍です。さすがにキリスト教学校教育同盟の主要な学校は、皆、美しいキャンパスを持ち、保っています。しかし、確かなことは、チーム光和ほどの匠の技でキャンパスを美しく装っている学校を未だ見たことがないということです。思わず「いい仕事をしていますねえ」と感嘆の声をあげたくなると共に、神様からもチーム光和の皆さんに「忠実な、良い僕だ。よくやった」（マタイ25章21節、23節）との祝福の言葉が告げられているように思えてなりません。私たち教職員も、光和の皆さんに支えられ、それぞれの持ち場で「いい仕事をしていますねえ」と評価される働きを全うしていきたいと願うものです。